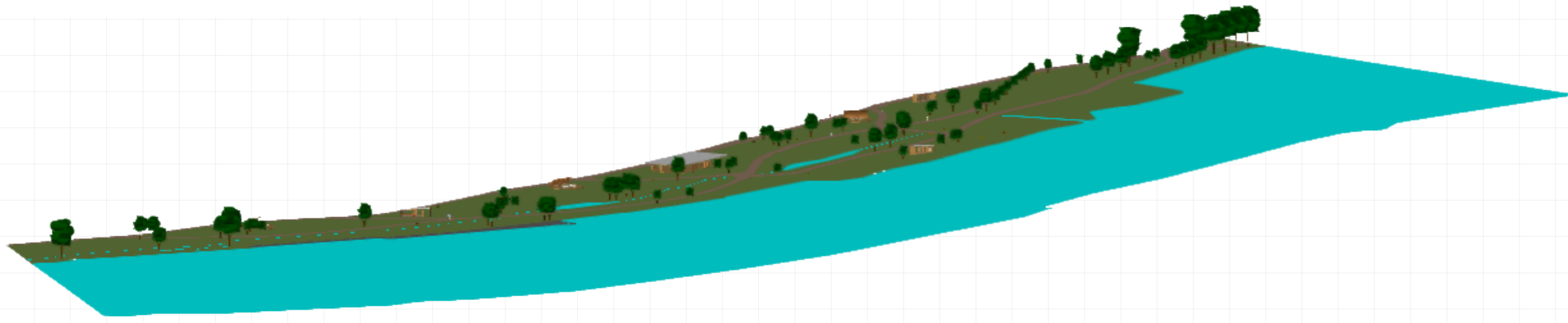


せせら木パーク

学籍番号 B23C035 氏名 餅田郁弥



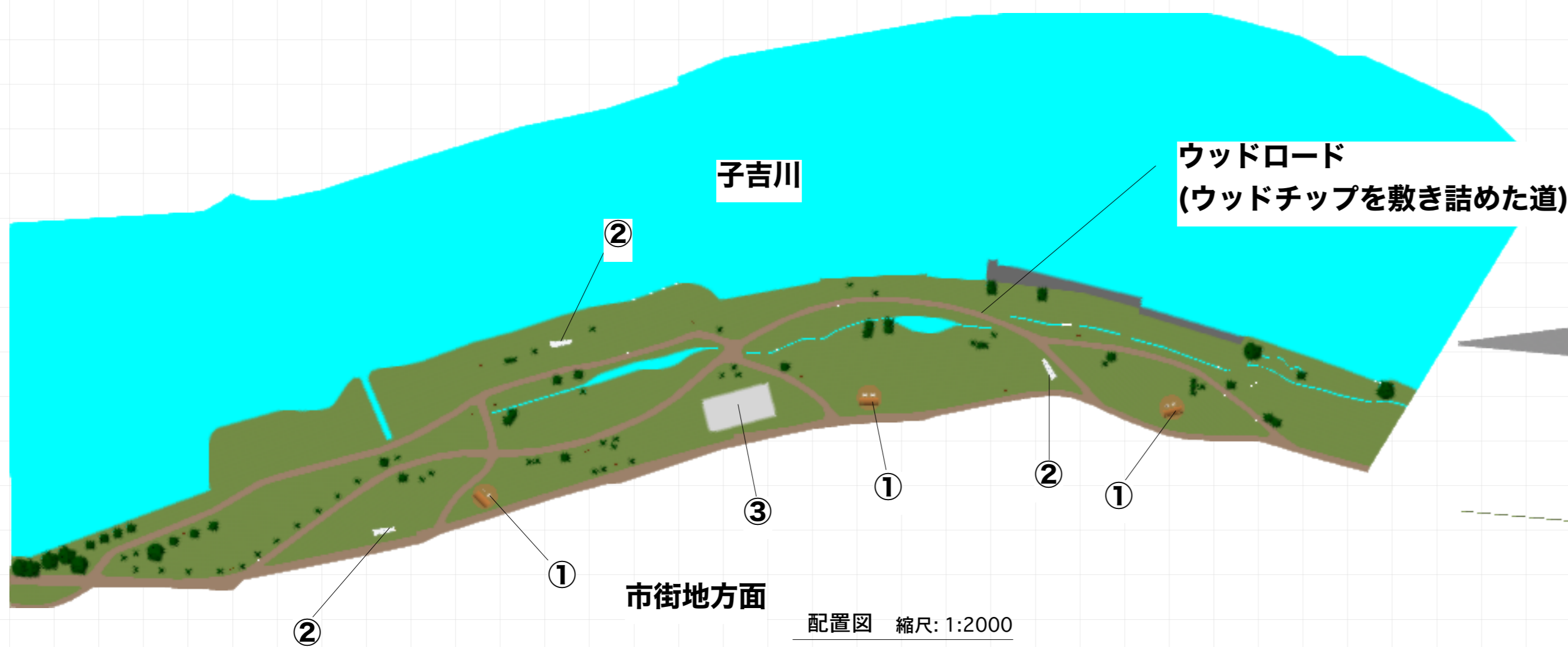
県産木材を使った人の拠り所となるような「小さな建築」を作り、子吉川という大きな風景を楽しめるようにし、由利本荘市と子吉川に再び大きな繋がりを生むきっかけをもたらすと共に、木材利用の促進に寄与するような空間を提案する。

problem

国内の人工林の約半分がスギ人工林であり、その中で秋田県におけるスギ人工林面積は36万6000haとなっていて、占有面積は秋田杉が日本一となっている。しかし近年では、ウッドショックの影響による木材価格の高騰や安い外国産木材の台頭によって、国産材の供給が減少し使われずに残っている状況となっている。他にも少子高齢化や第3次産業の成長によって、林業の担い手が少なくなっている。その為、林業が低迷する事による森林の荒廃や破壊が見受けられる。

solution

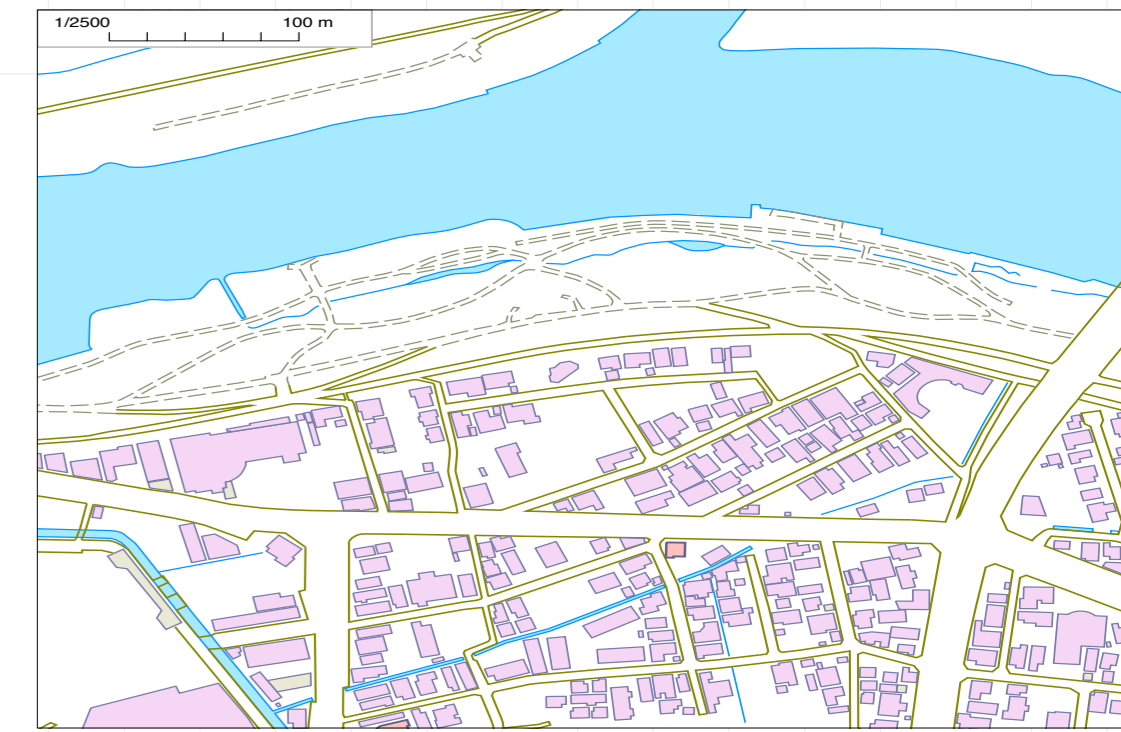
木材需要を高める為には、人の通る空間に小さな建築物として表現し、木材の存在が身近に感じれる事が大切である。そこで木材の特徴である「曲げに対する強さ」や「低い熱伝導率」を十分に生かしたものとして視覚的に表現するだけでなく、匂いや触り心地、音など人の持つ五感で木材の魅力が伝わるようにする事で、木材に対する知見が深まり、木材に多くの人々が興味関心を抱いてもらうきっかけとする。



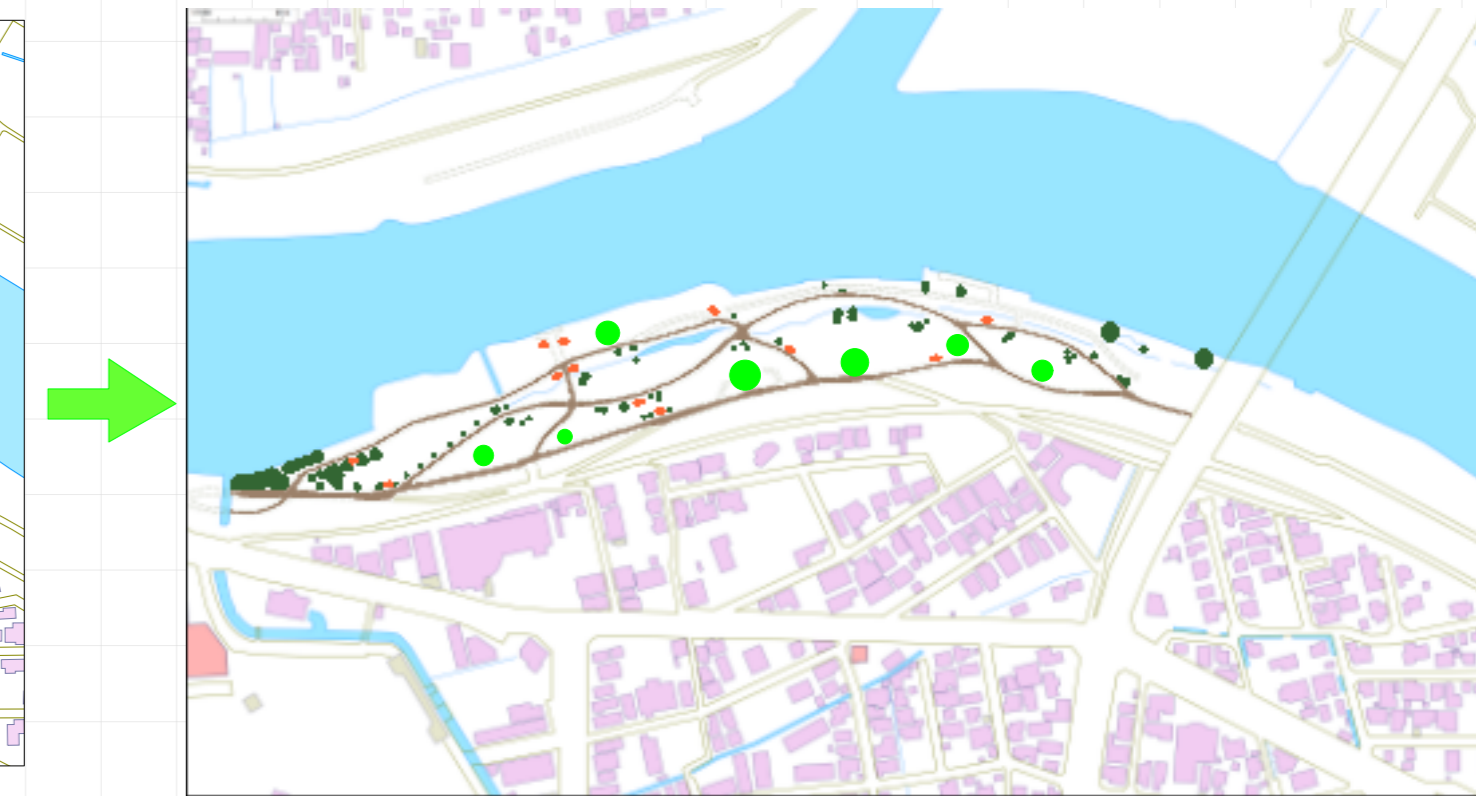
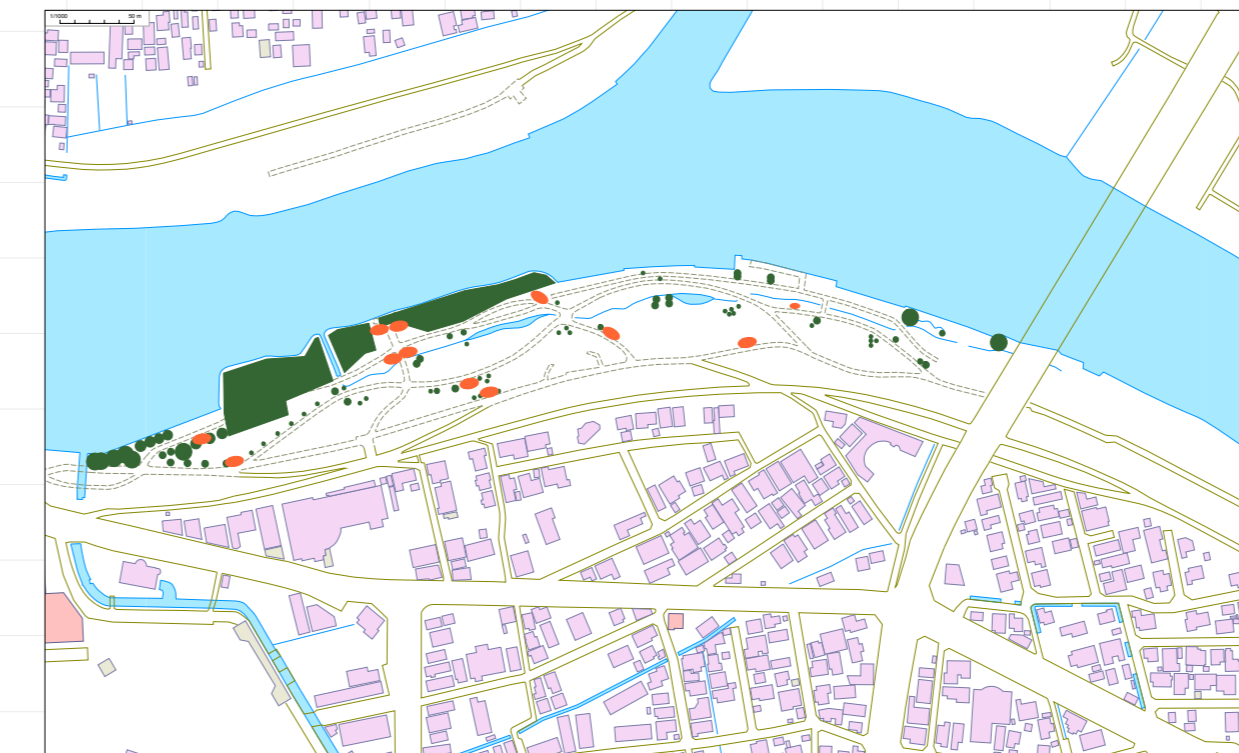
配置図 縮尺: 1:2000

site

今日の由利本荘市は子吉川と共に歩んできたと言っても過言ではない。古くは江戸時代まで廻り日本海西回り航路として開かれ舟運により人や文化の交流に大きな貢献をしてきた。また、ボートの歴史も古く、市民参加のボート大会が開かれるなどボート活動は子吉川の風物詩である。しかし、最近の子吉川を見ると、街との繋がりが弱く、川と街の距離が以前より離れているように感じた。その原因として、子吉川周辺の河川敷空間が殺風景であるために拠り所がなく、近づきにくさを生んでいるからだと考え。今回、計画敷地として設定した場所は「せせらぎパーク」と呼ばれているが、少数のパーゴラやベンチがあるだけで目立った利用はされておらず、市街地方面からの子吉川の景色が樹木に防がれ楽しめないという現状である。釣りやジョギング、犬の散歩など様々な目的で河川敷を訪れる人がいるだけに勿体無い空間となっている。



diagram



「せせらぎパーク」内にある既存の樹木(緑)とベンチやパーゴラ等(橙)の位置を調査した。すると、両者ともに道沿いに分布し、道と道の間の空間には空白が生まれていた。また、単に同じ様式で座る空間ばかりで人が長居したり集まって寛いだりする事に向いておらず、光や風等の環境条件がどこにいても同じである事から、多様な休憩の仕方が提供できていない。

周辺との調和のため道沿いにある既存の道や樹木は残し、景観の妨げとなっていた樹木を伐採した。そして、親しみが持てると同時に多様な休憩の仕方が出来る空間を空いていた場所(緑)に点をさせた。また、道となっている部分にウッドチップを敷き詰めて、視覚的な変化だけでなく踏んだ際の音として楽しんだり、転んでも大丈夫であるという事から安全面や防災面の観点からも意義のあるものとした。

建物概要① 建築面積：33.02(m²)
構造：木造



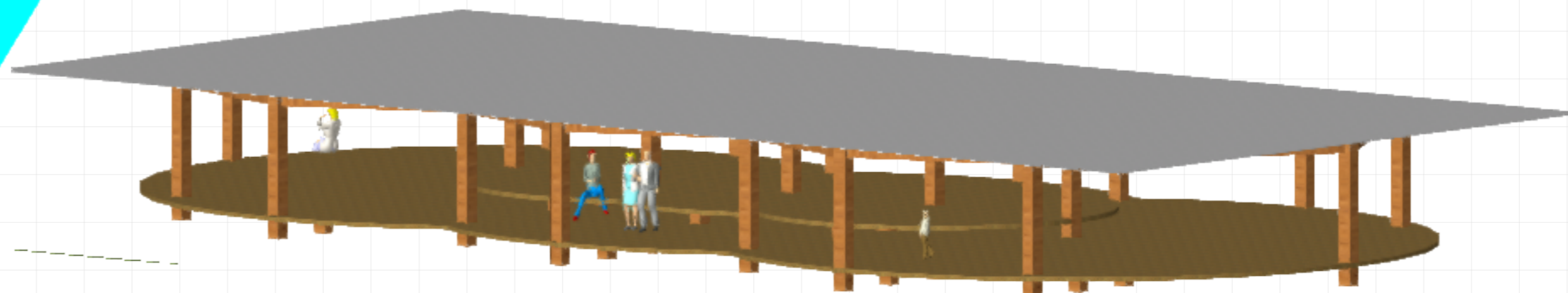
円形の木製デッキの上にアーチ状の屋根を設置し、雨風や日射を防ぎながら休憩できる。この建物は3箇所があり、アーチ状の屋根の位置で防げる日射の向き等が異なるので、多様な休憩の選択が出来る。また、デッキの上にはテーブル付きベンチを置き、以前まで無かったテーブルを使って長時間の寛ぎが可能となる。

建物概要② 建築面積：25.05(m²)
構造：木造



木材で出来た東屋の中に横長の腰掛けを設置し、子吉川を眺めながらの休憩が出来る。他の建物に比べて小さい空間となっていて、一人での休憩に適している。この建物も①と同様に3箇所があり、場所で異なる過ごし方が可能である。また、腰掛けに座った時の前後方向は開いていて風景を十分に楽しめるようになっていて、横方向には周りからの視線や風を遮る為の壁を作り、これはスギの有効活用を図る点で縦ログ構法によるパネルによって構成する。

建物概要③ 建築面積：471.24(m²)
構造：木造



大きな木製の円形デッキの上に屋根を架け、以前まで無かった雨風や日射等から完全に守られての休憩が出来る。この建物は他と比べて大きく、以前までバリアフリーステージとなっていた箇所だけに設置した。広い空間で且つ熱伝導率が低い事から、快適な状態で寝そべる事が可能である。